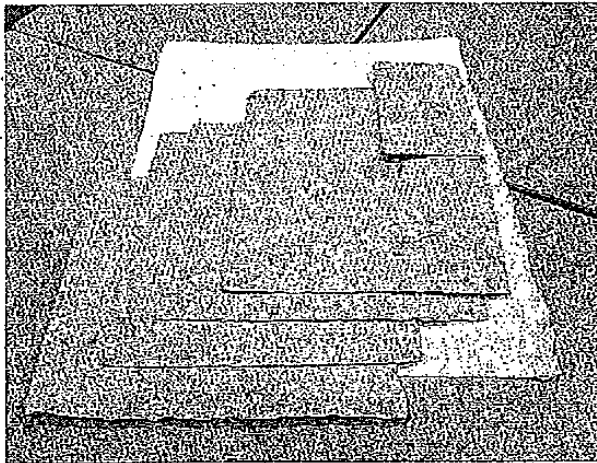


# 剪定枝で和紙試作品

## 弘大など産学官で取り組み

## 新たな観光資源化へ

多くが廃棄物となっているリンゴや桜の剪定枝を活用した新たな商品・サービスづくりに向け、弘前大学などが産学官で取り組んでいる剪定枝を原料とした和紙開発の試作品がこのほど完成した。今後、用途ごとの色合いや厚みなどについて検討し、ねぶたや金魚ねぶたなどの工芸品や製品フベルとしての活用をはじめ、紙すき体験ツアーなど新たな観光資源化を目指す。（西尾瑛）



和紙の開発に取り組んでいるのは、ひろさき産学官連携フォーラム内に今年10月に発足した「りんご／さくら和紙研究会」（代表・廣瀬孝弘前大学教育学部技術教育講座講師）。

今回完成した和紙はリンゴの剪定枝を使ったもの。

リンゴ剪定枝を原料とした和紙の試作品。剪定枝100%でも紙化できるほか、配合した楮との割合で異なる色合いが生まれる。

弘前市のゆめりんごファームのリンゴ園から収集した剪定枝をチップ化し、三菱製紙八戸工場の協力でパルプ化。県内唯一の紙すき施設である弘前市相馬地区の「紙漉の里」を活用した。

試作ではリンゴ100%のものは茶色。また通常の和紙原料である楮を多く混ぜるほど淡いピンクになるなど、その配合の割合で色合いが異なる和紙ができた。また、にじみにくいなどの特徴があった。今後は津軽藩ねぶた村の協力の下、工芸品の試作を行うとともに、用途に応じたサイズや厚さ、白色度の検討なども行うという。

廣瀬講師は「リンゴ関連からの紙化で使われているリンゴの搾りかすは繊維が短く和紙にするには楮などの混合が必要だが、剪定枝は単独でも紙にすることができ、よりリンゴ由来であることを強く訴えることができる」とした。

桜の剪定枝についても今年度中に試作を行い、併せてリンゴ、桜の剪定枝も募るという。

【令和2年12月9日(水)陸奥新報社2面 掲載】

この画像(記事)は陸奥新報社提供です。  
無断転載は出来ません。